サブ政治と制度政治の相克

――徳島における「緑赤連合」の軌跡――

村　瀬　博　志（一橋大学大学院）
樋　口　直　人（徳島大学総合科学部）

1．サブ政治と制度政治の「ニューポリティクス的接合」をめぐって――問題の所在

1998年に徳島市で行われた吉野川可動堰問題をめぐる住民投票署名運動以降，徳島市長選，住民投票，県知事選と，徳島県民は大きな対立を伴う選挙を経験してきた（高木ほか 2006）。地方政治史上，稀にみるような政治的激動の発端となったのが，2000年に徳島市で実施された住民投票である。可動堰計画に対する圧倒的反対を示した住民投票の結果は，徳島市政・県政を大きく揺るがすことになった。小池徳島市長（当時）は，住民投票の結果を受けて可動堰計画反対の姿勢に転じ，2001年４月に行われた市長選でも「あらゆる可動堰に反対」を訴え，住民運動の参加者から実質的な支持を得て三選を果たした。また，国政レベルでも，2000年８月の与党三党の合意で，撤回ではないものの，代替案も含めた検討のやり直しという可動堰計画の「白紙」が表明された。

それに対して，圓藤県知事（当時）は一定の柔軟姿勢を示すものの，基本的には可動堰計画推進派としての立場を崩すことがなかった。住民投票運動から勝手連への衣替え，すなわち住民運動の「地域政党化」の歩みはここから始まる。2001年の県知事選を皮切りに，４回の首長選で独自の候補者を立てて，住民運動は選挙戦に臨んだ。住民投票署名，住民投票の成功を含めれば，住民運動の戦績は３勝３敗となるだろう（後述）。本稿の目的は，勝手連とその同盟者という陣営内部の要因に着目して，首長選の勝敗の分岐を説明することにある。

ただし，それぞれの選挙の詳細については，すでに別項で詳述しているので省略する（久保田ほか編 2008）[1]。本稿で焦点を当てるのは，運動と既成非保守勢力との関係である。環境運動が政治的影響力を持つパターンにはいろいろあるが，西欧ではそれが緑の党として出現した。環境や人権，ジェンダーといった問題が生じたとき，それにいわば特化して新たな支持を得た政治勢力が，緑の党だったといってもよい。しかし，新しい問題の発生は必ずしも新しい政党の誕生に結びつくとは限らず，単に大きな運動組織が生まれる場合もあれば，左派政党が分裂・衣替えすることだってある（Poguntke 1993）。

ただし，いずれの場合にも新しい争点に対する応答性が高かったのは，「緑」と「赤」の組織であった。この両者は，第一の近代の左派と第二の近代の左派という点で相対的に近いが，２つの近代の相違に起因する相容れない点もある（Beck 1986；Beck, Giddens and Lash 1994）。では，両者は実際の政治の場でいかに連合を形成し，それはどのような点で限界を持つのか。本稿ではこの点に注目する。それにより，サブ政治と制度政治をいかに接合するか，ニューポリティクスと既成左翼の連合（緑赤連合）[2]はいかにして成り立つのかという問題についても，ある程度一般的な考察を試みたい。

２．制度政治とサブ政治をめぐる３層モデル —— 分析枠組み

まず，本稿で用いるサブ政治という概念について説明する。ベックによれば，個人化の進行によって異なる意味を持つ２つの政治が生じるという。ひとつは実質的にはもはや空洞化している制度的な政治であり，もうひとつはこれまで政治的なものとは認識されてこなかった日常的で実践的な政治である。ベックは後者をサブ政治と呼ぶ。サブ政治発展の条件は，①民主主義と社会福祉国家の（一定の）実現をうけて，一般市民が統制や参加などの手段を利用できるようになり，②技術＝経済的発展によってもたらされる事象が新たなイシューとして政治化することにある（Beck 1986；Beck, Giddens and Lash 1994）。これを図式的に表すと，図１のようになる。

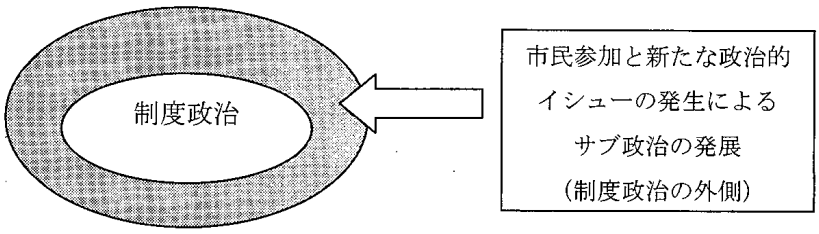

図1　ベックのサブ政治モデル

これだけみると，オッフェのいう「非制度的政治」としての新しい社会運動を「リスク社会論」の言葉で言い換えただけのようにみえなくもない（Offe 1987）。しかし，サブ政治の担い手は，社会運動のような集合的アクターだけに限定されない。ベックはサブ政治の特徴として，制度政治の外部にいる行為主体が参加できる点に加え，「社会的集合的行為主体だけでなく，個々人も」（Beck, Giddens and Lash 1994＝97：46）サブ政治の担い手として想定している。たとえば，個人化の進展による「親密性の変容」（Giddens 1992）は従来までの政治的決定を経ずして，政治の前提を大きく変えていく（Beck 1986＝98：400-1）[3]。

このようなサブ政治概念の特質を生かして分析するには，社会運動のような集団による行為と個人による行為を区別したほうがよい。そのため本稿では，村瀬（2004）の枠組みを用いてオッフェの議論を付け加え，サブ政治概念を限定的に用いる形で，制度政治－非制度政治－サブ政治の３層を措定する（図２）。公的な影響を持つ事柄に関する意思決定を行うとき，それぞれの層は政治的性格を帯びることになる。そのうえで，３層の相違を以下のように定義しておく。

① 制度政治：代議制民主主義の枠内でなされる。

② 非制度政治：制度政治の枠外で組織的なアクターにより担われる。

③ サブ政治：制度政治の枠外で個々人が自らの生活歴を選択する行為の一環として行われる。

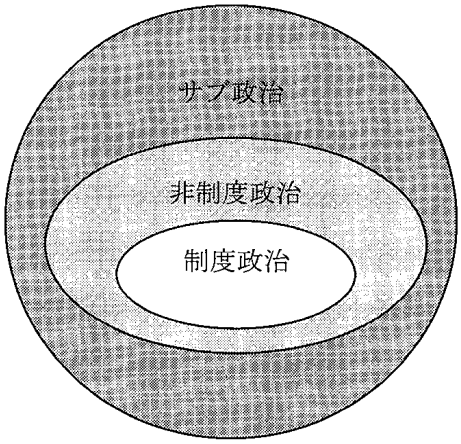

図2　修正サブ政治モデル

本稿で取り上げる徳島の事例についていえば，「制度政治－非制度政治－サブ政治」というそれぞれの層は「既成非保守－勝手連－一般市民」に対応する。可動堰問題に関する審議会に働きかけていた段階では，住民運動は大きな影響力を持ち得なかった。それが，住民投票という形で一般住民が担い手となった段階で，大きく局面が転換したのである。つまり，住民投票という手法を用いることによって，住民運動は可動堰問題を徳島市民全体の前に提示し，徳島市民を「コップ１杯の選択」(4)という日常生活に根ざした政治の担い手とした。すなわちサブ政治の発展を促したのである。

この３つの層のうち，制度政治は政党や議員，利益集団からなり，政治への関与を生業としている。しかし，ベックがいうように制度政治がチェックせずして決定される領域が広がるにつれて，政治化されない領域を再政治化するべく非制度政治が発展する(5)。ただし，通常の非制度政治は社会運動のような集団レベルにとどまることが多い。こうした集団は，有権者の負託を受けた行為者ではなく，代議制民主主義の正統性の危機に対する根本的なオルタナティブとはなりにくい(6)。そこで，そのさらに外延にあるサブ政治の担い手たる市民一般が参加して，「サブ政治の民主化」を行うことが，サブ政治の発展には不可欠となる。

本稿では，この３層が可動堰問題のそれぞれの局面でどのように活性化したのか，それがどのような結果をもたらしたのかについて考察する。ここでは勝手連の同盟者たる既成非保守および有権者との関係に着目し，以下のような前提にもとづき分析を行う。

① 非制度政治の供給者たる勝手連が台頭するにあたっては，「制度政治」と「サブ政治」の双方との連合形成が必要だった。

② 制度政治はサブ政治の要求に対する応答性が低い。サブ政治は，制度政治の要求に無関心であるがゆえに，棄権という形で応答する。両者は異なる論理で作動するがゆえに，双方との同時的な連合形成は原理的な困難を抱えざるを得ない。

③ 両者を媒介するのが勝手連であるが，「政治の素人」による「ボランタ

リーな参加」に依存するがゆえに，制度政治との親和性は低い。こうした異なる主体の参加をめぐるアンチノミーを一定程度解消できなければ，非制度政治の勝利はありえない。

3．住民投票から勝手連へ，そして市長選へ —— 各局面での展開

(1) 勝手連の予兆 —— 構図の設定

では，可動堰問題のそれぞれの局面に注目しながら，「制度政治－非制度政治－サブ政治」の活性化についてみていこう。1998年の住民投票署名運動は徳島市民の約５割もの署名を集めることに成功したが，1999年２月の徳島市議会で直接請求による住民投票条例案は否決される。もしこのときに住民投票条例案が成立していれば，住民運動は有権者を投票にいざなう媒介者の位置（非制度政治）にとどまっていただろう。しかし，運動はその次なる一歩を踏むことになる。つまり，「議会を変えよう」と自らが政治体内部（制度政治）の行為者になることにより，住民運動は保守勢力にとって本格的な脅威となっていく。その脅威の代名詞となったのが，2001年６月に結成された勝手連である。勝手連は住民投票運動を母体としているが，住民投票条例案を可決させるために，1999年４月に行われた徳島市議選で議会政治にも進出していた。その後も，2003年の県議選では知事与党を増やすべく６選挙区で候補者を擁立，市議選でも２議席を維持し，一種の「地域政党化」していくことになった（表１）[7]。

表１　住民運動側の候補者の議員選挙結果

99－00年市議・町議選			03年県議選			03－04年市議・町議選		
市町名	氏　名	結果	選挙区	氏　名	結果	市町名	氏　名	結果
徳島	大谷明澄	当	徳島	本田耕一	当	徳島	大谷明澄	落
徳島	金丸浅子	当	徳島	豊岡和美	当	徳島	金丸浅子	落
徳島	土佐久丸	落	小松島	萬宮千鶴子	落	徳島	村上　稔	当
徳島	豊田雅信	落	板野	石井哲夫	落	徳島	久次米尚武	当
徳島	村上　稔	当	阿波	吉田益子	当	藍住	西岡恵子	当
藍住	西岡恵子	当	三好	工藤政幸	落			
藍住	石川　薫	落	海部	西口　晃	落			

3層モデルの観点からみると，1999年2月までの住民投票請求と，その後の議員や首長の候補者擁立の間には，質的な断絶がある。運動は住民投票を請求していた段階では，「政治体－運動体」「運動体－有権者」という2つの二者関係を媒介する役割を果たしていた。しかし，議員や首長候補者を擁立した段階で，運動は単なる媒介者であることをやめ，政治体内部(制度政治)の行為者にならざるをえない（図3）。ここに至って，政治体内部で既成政党－運動（勝手連）が有権者の支持をめぐって競合する三者関係が成立する[8]。

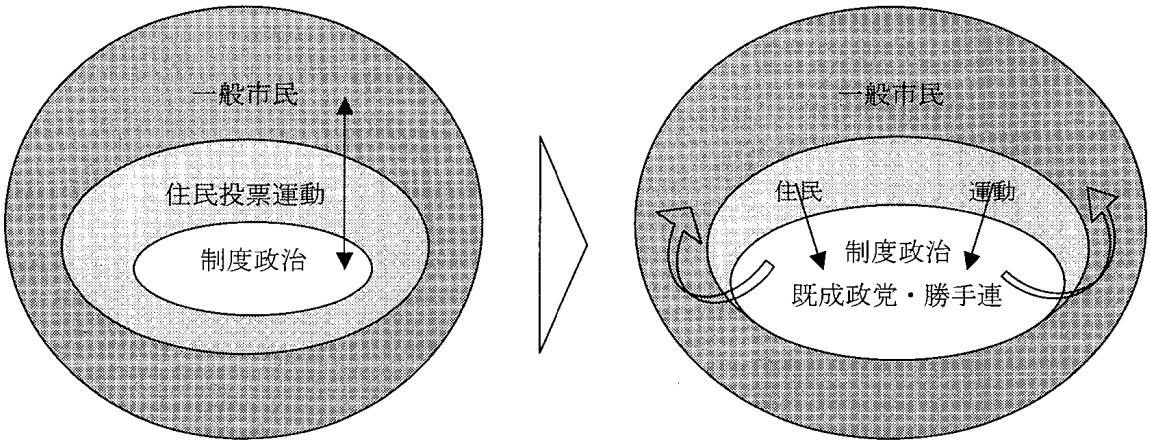

図3　修正サブ政治モデルの適用：住民投票から勝手連へ

住民投票時にサブ政治の活性化（可動堰問題の是非を一般市民に問うこと）という難題に直面したのは保守側であり，運動側は単一争点の是非を通じてサブ政治への応答性を問うことにより既存の組織にくさびを入れられる[9]。しかし，住民投票の会から勝手連へという展開は，単なる名称の変更を意味するわけではない。住民運動は目的に応じてさまざまな組織を立ち上げてきたが（図4），勝手連以降は運動側も保守勢力と同じ土俵で競合することになる。同時に，同盟者たる既成非保守との関係も構築しない限り，運動側の影響力は発揮しえない[10]。ただ，後にみるように，徳島の事例における同盟者（既成非保守）は勝手連に追従するフォロワーの位置にとどまったと考えられる。組織力で圧倒的優位にある同盟者が勝手連の追従者となったのは，勝手連の政治的構想力がサブ政治を動かし，同盟者を凌駕する影響力を持っていたからである[11]。

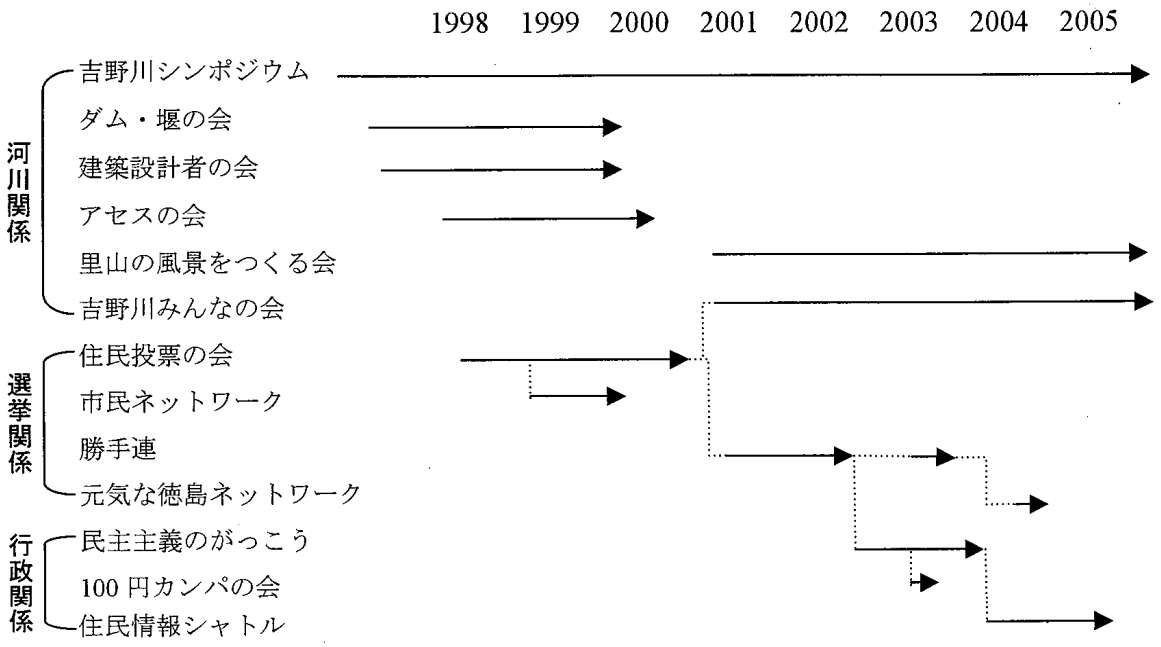

図4　住民運動の組織的変遷

(2) 勝手連の選挙戦略と組織ネットワーク

住民投票――「市民だけ」の戦略の成功

まず，徳島における主な既成非保守勢力の動きを表2で概観しておこう。これをグループ分けすると，以下のようになる。

①**民主党**：旧社会党からの流入組が多数を占める。四国では唯一，2名の衆院議員を擁するだけに，周辺部の県としては強い勢力を持つ。ただし，他の県と同様に党組織自体は強力とはいえず，連合とフレッセが実働部隊となる。社会党出身の有力代議士である仙谷由人氏の後援会は保守地盤にまで支持者を広げており，その強い組織力と相俟って徳島の民主党は「仙谷党」とも呼ばれる。

②**共産党**：ここに登場する他のいかなる団体とも良好な関係にはないが，共産党は一定の組織力を持つ。また，住民運動への協力を党勢拡大の機会として捉えているため，運動への関与に関してはもっとも積極的な姿勢を示す。

③**連合とフレッセ**：民主党の主要な支持基盤で，三者は共闘することが多い。建設労組であるフレッセは郡部にも組織を持ち，都市部中心の民主

党にあって貴重な支持基盤となっている。労組関係者のなかには住民運動に関わった者も一定程度存在するが，市民運動に対する態度はかなり多様であり，運動に対してアレルギーを持つ者も多い。また，連合徳島の構成員の半数近くを占める自治労は，現職候補との関係などから必ずしも民主党と足並みをそろえるわけではない。

④**自由党**：かつて代議士１名と県議１名を擁していたが，徳島では自民党と歩調を合わせることが多かった。徳島市よりも小松島市や阿南市に議員の地盤がある関係上，県南での勢力が強い。民主党との合併により，小沢一郎・民主党代表の系列である一新会を残して組織はなくなった。

⑤**社民党と新社会党**：分離した政党同士ではあるが，もっとも近い関係にある。ただし，社民党の組織力はほとんど残っておらず，党員や活動では県西部を中心とする新社会党のほうが組織を残している。大田氏の立候補で社民党県議はいなくなり，推薦の議員が１名残るのみとなった。新社会党は2002年に県議１名が離党し，議員はいなくなった。

⑥**部落解放同盟**：国政では民主党との共闘体制を敷いているが，徳島では選挙区ごとに事情が異なる。一区では民主党の仙谷氏支援だが，二区と三区では自民党の代議士を支持している。国の同和対策事業が終了してから急速に勢力が衰えたとされるが，徳島市内では一定の勢力を保つ。

⑦**無所属の会**：三木武夫元首相の娘である高橋紀世子・元参院議員の後援会であり，組織として強いわけではないが2004年に高橋氏が引退するまでは実態があった。1998年の参院選で高橋氏を支援したのが，住民運動が選挙に関わった最初の経験であり，早くから協力関係はできあがっていた。

既成非保守との関係という点でいえば，運動の独立性がもっとも高かったのは住民投票の時点だったといえる。住民運動に対して，住民投票から組織的に関与し続けてきたのは共産党だけであり，これは協力を党勢拡大につなげるというねらいに基づく。社民党，民主党，新社会党は，党員の多くが署名集めをするなど一定の協力はするが，組織的に関与したわけではない。労

働組合に至っては，個人的な活動以外は行っていない。

表２　既成非保守の対応

	住民投票署名	住民投票	01年知事選	02年知事選	03年知事選	04年市長選
共産党	積極的に関与	反対派	大田支援	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
社民党	運動支援	反対派	自主投票	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
民主党	運動支援	反対派	自主投票	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
自由党	不関与	不関与	圓藤推薦	河内支援	大田推薦	――――
新社会党	運動支援	反対派	大田支援	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
連合	関与せず	投票呼びかけ	自主投票	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
フレッセ	関与せず	自主投票	自主投票	大田推薦	大田推薦	姫野推薦
部落解放同盟	関与せず	自主投票	自主投票	大田推薦	大田推薦	自主投票
無所属の会	運動支持	反対派	大田支援	大田推薦	大田推薦	姫野推薦

注：『徳島新聞』とインタビューデータによる。ゴチックは02,03年選挙での６団体／７団体メンバー

こうした関与の実態より重要なのは，勝手連の前身たる住民投票の会が組織としての参加を受け付けず，既成非保守勢力はすべて「個人」として住民投票運動に参加した点である(このような運動と既成非保守との関係は,2001年の知事選まで続くことになる)。このことは，以下の２つの点で重要性を持つ。

① それまでの市政県政は，共産党 vs 他政党の相乗り候補という形で亀裂が実質的に無効化されていた。住民運動への関与に当初から積極的だったのは，共産党だけであった。しかし，署名から実際の投票に至る過程で，既成非保守は住民運動側へと傾き，その後の選挙を規定する亀裂が形成されていくこととなる。

② それと同時に，住民投票運動を組織が牛耳る事態を回避することにより，既成非保守では引き付けられない無党派層や保守層の一部を味方に引き入れることとなった。住民運動自体は弱い組織しか持たなかったが，既成非保守をリードする争点の提示と，サブ政治の活性化という構想力により構図を書き換えたのである。

2001年知事選 —— 大田候補という選択肢の採用

勝手連が結成されたのは2001年６月であり，同年９月の県知事選に向けた候補者擁立を目的としていた。ここで重要なのは，当初は「純粋市民派」の擁立を模索していたのに対し，それを断念したことから社民党県議である大田正氏という議会人かつ党人を立てたことにある。当初，大田氏が候補として浮かんだ際に，勝手連のメンバーのなかには社民党の議員をかつぐことに反対の意見もあった。しかし，大田氏は1999年の県議選でも可動堰反対を掲げて当選しており，住民運動の集会にも出席して積極的に発言していた。野党議員の中では住民運動にもっとも立場が近いとみなされていたし，候補者選定が難航する中で大田氏が出馬に前向きの姿勢を示したことが大きかった[(12)]。

その後，大田擁立の承認を求めて勝手連メンバーが社民党県本部に挨拶に行った際には，「社民党という入れ墨」は消えないがそれでもいいのかと社民党県連代表は聞いたという[(13)]。この懸念は，大田氏の「党派性」という点では杞憂に終わるが，大田氏の「行動」という点では現実のものとなる（後述）。

勝手連は，有権者に対して現職の圓藤氏以外の選択肢を提示することを重視した。勝手連の代表世話人の１人は「候補者の押しつけではなく，徳島の未来を決める選択肢が２つあることを知らせる選挙戦にしたい。従来の組織の枠に属さない『普通の住民』の動向が最大の焦点。投票率50％突破を目標に，大田さんへの投票というよりむしろ，県民投票であることを訴えて，どちらを選ぶか判断を仰いでいきたい」（『朝日新聞』2001年８月29日）と述べている。つまり勝手連は，県知事選を「大田氏個人に対する投票」の場ではなく「徳島の未来を決める県民投票」の機会として位置づけていた。「県民投票」という言葉の使用は，「住民投票」の経験を活かそうとする運動参加者の思いを如実に示している。

また勝手連はこのときの選挙で一切の政党・組織からの推薦を断った。勝手連の大田擁立を受けて，共産党は独自候補の擁立を見送り大田支援にまわる。民主党も候補者を立てず，自主投票という形ながら個人的には大田支援

に動いた者も多くいた。結果として圓藤氏と大田氏の一騎打ちとなり，５候補が乱立した同年１月の徳島市長選とは打って変わって，勝手連が非保守の主導権を握ったことがこの選挙で明確になったといえる。

この知事選は勝手連の側からすると，既成組織に頼ることもなく自らの力で自らの思いを託した選挙であり，下記の引用のように運動内部の結束は強かった。組織力では太刀打ちできない大田氏が徳島市では圓藤氏を上回る得票数だったのは，住民投票の余波に加え，大田氏という現職・共産党以外の選択肢が示されたことによるだろう。しかし善戦はしたものの，市外では４万票の差がつくこととなった。

> 最初の選挙は，ほんとうにやっぱりあの自分たちが，選挙やりたかったですしね，やっぱり知事を作りたかったというね，すごい意識があって。だから，やっぱり「自分たちの知事を出そうね」っていうものすごいこう夢があって，駆け抜けられたような気がしますね。だから最終的には負けたんですけども，第一回目（の知事選）が，一番楽しかったかもしれない[14]。

> やっぱり，一回目の選挙は一番楽しかったんよね，手作り選挙で。負けたけど。ほらもう，労働組合のいろんなんが備わった選挙から，恵まれた選挙からするとすごいきびしい状況のなかでやったんよね。でも，政策だけはしっかりしたのがあったからね，「とめる，きめる，つくる」[15]っていうやつ[16]。

2002年知事選 —— 勝手連＋６団体の勝利

大田氏が出馬した2001年知事選から半年後，圓藤知事の汚職逮捕・知事辞職に伴う出直し知事選が行われることになった。このときには，再結成された勝手連がスムーズに大田氏を擁立したのに加え，政党や団体にも推薦を依頼した。その結果，民主党，社民党，連合，フレッセ，部落解放同盟，無所属の会が大田氏を支援する６団体連絡会を発足させ，共産党と新社会党も大田氏を推薦した。自民・自由両党が支援する女性候補に対して，それ以外の勢力が対峙する形を，勝手連が演出したのである[17]。

ただし，演出したのは勝手連であるが，既成非保守組織は勝手連の政治構想に賛同して参集したとは必ずしもいえない。2001年に自主投票だった連合

とフレッセにとって，それまで一定の関係を築いてきた圓藤氏が去った段階で，社民党県議として関係があった大田氏を推すのは自然のことであった[18]。部落解放同盟にしても，町議時代以来30年の付き合いである大田氏が出馬するならば，支持するのは当然だという[19]。

勝手連にとって，大田氏は「純粋市民派」ではないいわば次善の候補であったが，彼の「入れ墨」は徳島の「緑赤連合」の形成にはプラスに働いたといってよい。この時点では，自民党によるイデオロギー攻撃も不発であり，有権者も社民党ではなく勝手連の大田とみなしていた。「勝手連候補」「社民党県議」という双面神的な性格が，うまく機能していたといえるだろう。現職知事の贈収賄という追い風もあり，大田氏は当選を果たした。

2003年知事選――「大田でいいのか」の自己成就的予言

しかし，「保守王国」徳島で半世紀ぶりに誕生した非自民系知事である大田氏に対して，県議会の多数派野党は就任直後から激しい攻撃を行った。県議会において知事と保守側との対立が繰り返された結果，知事就任からわずか11ヵ月後の2003年３月，大田知事に対する不信任が可決され，みたび大田知事が立候補することになった。ところがこの知事選では，既成非保守とは逆に勝手連が大田氏擁立をめぐって及び腰になった。11ヶ月の県政の「混乱」よりも，大田氏が知事在任中に国土交通省に対して可動堰反対を正式に申し入れなかったことが，勝手連内部で異論が出た最大の要因であった。そもそも，勝手連自体は可動堰問題をめぐる運動から生まれ，そのために大田氏を擁立して当選に導いたからである。

住民運動に熱心に取り組んできた人ほど，自民党との対立があったとはいえ，大田氏には裏切られたという気持ちを強くもってしまう[20]。この知事選では大田氏ではなく運動のリーダーである姫野氏の出馬も検討していたが，大田氏の懇請により結局は大田氏の出馬をおさえられなかった格好となる。代わって姫野氏が前面に出て支援することで組織を維持しようとするが，「大田氏を推す組織」から「大田氏に頼まれて動く組織」へと変貌した勝手連にあって，メンバーの一定割合は選挙から離れていく[21]。この点について，勝

手連の中心メンバーは以下のようにふりかえっている。

勝手連の結成そのものが非常に難しかった。(市民の手によって) 選ばれた知事に対して，やっぱり物凄くみんな期待していた。期待したわりには，なかなか公約が実現していかないということに対して，非常につらい思いをしてきたということがあって。今回また選ばれたところで，また同じことになるのであれば，力が入らないっていう意見が非常に強かった。勝手連っていうのは，みんなボランティアなわけだから，自分の気持ちが盛り上がってきて，「これはやらないといかん」「やりたい」というようになったときにできるわけで。今回はなかなかやろうという気になれないっていう，勝手連はもうぎりぎりまでできなかった[22]。

それに対して，政党サイドは早々と大田支持を決めてしまった。中央の方針変化により，自由党も支持に転じて前回の6団体から7団体の連絡会が結成された。既成組織も勝手連も，不信任に対する怒りという点で相違はない。しかし，勝手連の論理からすれば，可動堰反対は何を差し置いてでも申し入れなければならない最重要の課題であった。大田氏は党派色を出した県政運営を行ったわけではないが，かつての同僚からなる議会に対する配慮が先立って，公約の多くを結果的に反故にしていく。

このような制度政治内の論理を，非制度政治のアクターたる勝手連は受け入れられなかったといってよいだろう。2001年の段階では「一心同体」だった勝手連と大田氏は，2002年の組織選挙を経て，2003年には制度政治と非制度政治の論理の間で距離が開いていった。こうした隙間は，大田氏の「個人的資質」に対する疑問にもよっていたが，それ以上に可動堰問題に対する温度差に起因していた。民主党に近い勝手連のメンバーも，以下のように大田氏の「制度政治的」体質について述べている。

(2003年知事選のときは) 政党とか組織じゃなくて，1人1人の県民に担がれた「勝手連の大田知事」っていうのを売り出したかったんよ，私なんかは。だけど，労働組合はそうはいかんし，大田さん自身も気を遣うんよね。市民運動してる人たちは「勝手連と言え」と言うし，大田さんの心のなかは，「あまり勝

手連と言っては，労働組合の人に悪いだろう」っていうんがあるんよね。知事が選ばれたときに「県民が選んだ知事」って言うでしょ。じゃあ，橋本知事と田中知事と大田知事，「県民が選んだ知事」って言うけど，よそもみな県民が選んでるでえ。どこが違うかっていうたら，「誰に担がれてるか」っていうんが違いなんよ。「徳島の大田さんも，県民一人一人が担いだ知事です」っていうのを全面的に出して，選挙戦をやりたかったんだけど，大田さん自身がそこらをちょっと，気遣ってたような気がするんですよ[23]。

つまり，2002年にはうまく機能した「勝手連候補」「社民党県議」という双面神的性格が，2003年には既成非保守と勝手連の温度差，勝手連メンバーの離反という形でマイナスに働いた。大田氏が古巣である制度政治に近寄りすぎたがゆえに，勝手連から全面的な支持を得ることができなくなったからである。

2004年市長選 —— 協調体制の崩壊

先に3勝3敗と書いたが，2004年徳島市長選における敗北は他とは性格が異なる。2001年，2003年の知事選では勝手連候補が敗れはしたものの，徳島市では対立候補を上回る票を得ていた。それが初めて，運動の絶対的なリーダーである姫野氏を候補としつつ，市内で敗北したのである（松谷 2006）。その要因として，まず明確に争点を示して浮動票を得てきた勝手連が，争点のない「平時選挙」にしてしまったことを挙げられよう。特に可動堰問題は，対立候補の原氏が反対を表明したことにより，争点とはならなかった。その意味で，サブ政治の反応はこれまでの選挙のなかでもっとも悪かったと考えられる。姫野陣営はそれを読みきれず，住民投票の再来を期待していた節がある[24]。

大田氏の選挙では十分機能していた制度政治との連合は，非制度政治の中心を担ってきた姫野氏が出ることで綻びをみせ始める。これまでいかに共闘してきたとはいえ，姫野氏はあくまで市民運動の人間であり，制度政治側の候補としてはみなされていなかった。連合は姫野氏を推薦するが，市職労は自主投票にまわる。大田氏のことはほぼ無条件で支持していた部落解放同盟

も，実質的に自主投票に転じている[25]。

加えて，当の勝手連もそれまででもっとも機能しなかった。「選挙には出ない」と言い続けてきた姫野氏が，なぜ今になって市長選に出るのか。こうした疑問を「自分のなかで消化できなくて」[26]選挙に加わらなかったメンバーは多い。姫野選対関係者によれば，勝手連として活動していたメンバーのうち，4割程度しか選挙時に動いていなかったという[27]。運動のリーダーが初めて選挙に出たのに，メンバーが動かなかったのは両者の距離が離れてしまったことを意味する。姫野氏は，政策協定を拒むなど「運動」の論理に依拠しつつも，本拠たる非制度政治の部分で支持を失ってしまったといってよいだろう。

(3) 3層連合の推移

ここまで経緯をみてきたところで，各選挙における3層の動きをまとめたものが表3である。住民投票の時点において，サブ政治は閾値を超えて活性化したと考えられる。住民投票の可動堰反対票は102,759票であり，徳島市の全有権者の約半数であった。それ以外の選挙では2003年知事選の投票率62%が最大であり（徳島市内は57%），どの候補の得票数も「可動堰反対票」には遠く及ばない。その後も，サブ政治（可動堰問題の是非を一般市民に問うこと）に共鳴した人びとは2003年知事選までは勝手連の主たる支持者となり，勝手連の徳島市での不敗神話を支えたとみられる。そして明確な争点がなくなった2004年市長選において，機能を大きく低下させることとなった。

非制度政治たる勝手連は，制度政治の論理が大きな問題とならなかった2002年知事選までは，閾値を超えて機能していたといえるだろう。しかし，「議会人」大田氏に対する失望が先立った2003年知事選，そして「なぜ今になって姫野氏が出るのか」という疑問が相次いだ2004年市長選では以前ほど機能しなくなったといえる。

最後に制度政治のアクターたる既成非保守は，非制度政治やサブ政治を引き付けるような独自候補を擁立するだけの構想力も人材もなかった。そのため，2001年知事選までは非制度政治（住民運動や勝手連）の決定に追従する

結果となった。しかし，2002年知事選で「保守打倒」を目的とした大連合が形成されたことで，既成非保守の一本化という，その後の選挙にも通じる枠組みを形成している。しかし，「議会人」である大田氏への支援はまとまっても，姫野氏が出馬した2004年市長選では一枚岩とはならなかった。

結果的には，サブ政治と非制度政治が結び付いた住民投票と，非制度政治を制度政治が助けた2002年知事選において，閾値を超えた連合が形成された。この２つのピークは重なっておらず，それぞれがずれることで2003年の知事選まで徳島市内での勝利を確保してきたといえるだろう。それが2004年の市長選ではすべての機能が低下したがゆえに，市内で初めての苦杯を味わうことになったと考えられる。

表３　各選挙における３層の動き

領　域	担　い　手	住民投票	01年知事選	02年知事選	03年知事選	04年市長選
サブ政治	一般市民	＋	0	0	0	－
非制度政治	住民運動（勝手連）	＋	＋	＋	0	0
制度政治	既成非保守	0	0	＋	＋	0

注：表中の０を閾値として考える。＋ならば閾値を超えて機能し，－ならば機能しなかったことを示す

一連の選挙で主役となった勝手連は，そもそもサブ政治から現れ（姫野氏自身も最初はただの釣り人であった），その需要を汲み取ることで影響力を発揮してきた。すなわち，勝手連の生命線は選挙の勝敗というよりも，サブ政治の民主化にこそ存在すると考えられる。2003年の県知事選後に姫野氏が行った以下の発言は，勝手連がサブ政治の民主化を重視していることをよく物語っている。

勝手連の選挙活動の特徴は，プラカード作戦[28]に象徴されるように，有権者個人個人の良心を信じ，自主的判断を尊重する手法にあります。市民を信じ市民の判断にゆだねる運動の発想は，徳島市の第十堰住民投票以来，ぼくたちが一貫して採ってきた方法です。この５年間，こういう共同体験を経た徳島市民の政治的成熟度はなかなかのものですよ。なにしろ，個人の判断が集まって出た結果は，良くも悪くも人のせいにするわけにはいかない，というのがいいですよね。こうして有権者は政治という舞台で「観客」から「プレーヤー」に変わ

っていくのでしょう[29]。

しかし，選挙を重ねるにつれて勝手連自身も少しずつ制度政治の側へと移っていく。しかも，その移行は中途半端なままに終わっていた。ここで図5をみてほしい。この図は，「制度政治－非制度政治－サブ政治」の相互作用関係を示したものである。サブ政治の民主化が行われる閾値は，そこで提示される選択肢がどの程度サブ政治の論理を体現しているかで決まるものと思われる。徳島市民を「コップ1杯の選択」という日常生活に根ざした政治の担い手とした住民投票にあっては，サブ政治が全面的に活性化したがゆえに多くのハードルを乗り越えることができた。

しかし既成非保守勢力は制度政治の論理によっているがゆえに，サブ政治の論理とは親和性を持たない。自民党ほどではないにしても，非保守勢力がサブ政治によって活性化することはない。「保守打倒」を目的とした2002年知事選，「大田知事不信任」をうけての2003年知事選での制度政治の活性化が示すように，むしろ，サブ政治が沈静化したほうが非保守勢力の動きは活発になると考えられる。

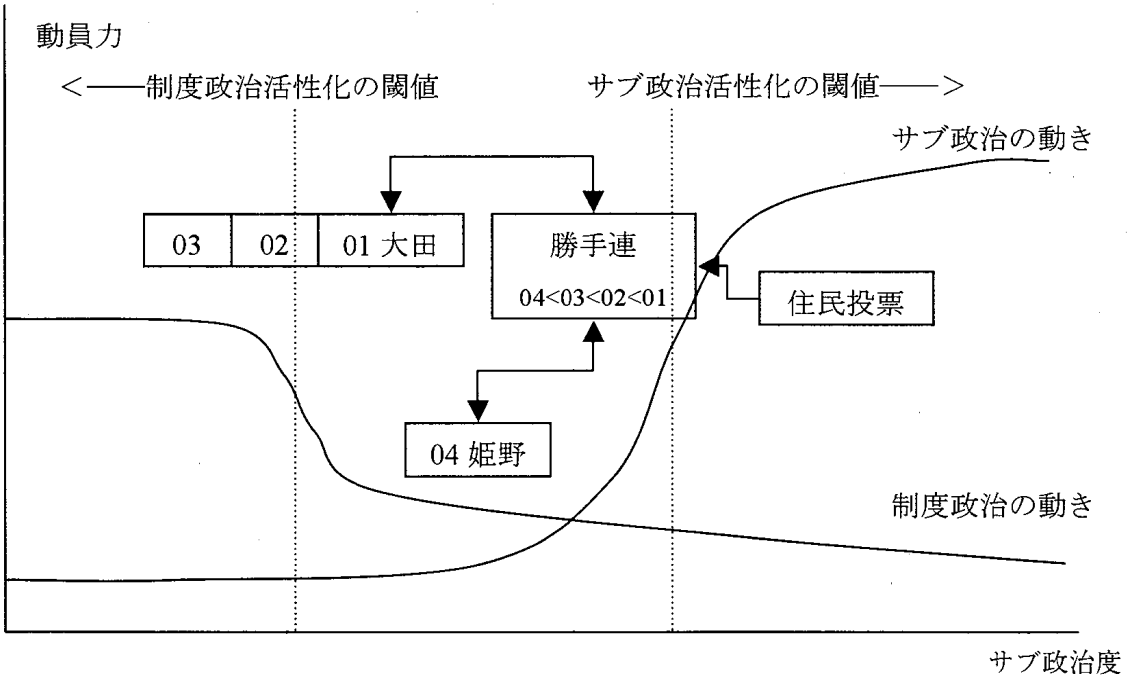

図5　非制度政治の位置と制度政治／サブ政治との関係

このような概念地図のなかでの動きをみると，勝手連＝大田連合は「運動」「議員」という二枚看板を持つことにより，サブ政治と制度政治の双方から支持を得ることができた。しかし，大田氏は当選直後に「運動」の論理で行動して痛い目にあって以降[30]，「議員」の論理に傾斜していったと思われる。それにより，勝手連と大田氏の距離が離れすぎてしまい，制度政治（既成非保守）と大田氏の連合は成立しても，勝手連と大田氏の連合はうまくいかなくなった。それに対して姫野氏は，可動堰問題の沈静化によりサブ政治（一般市民）からの支持も得られず，非制度政治（運動）の人間とみなされたことで制度政治からの支援も十分に受けられなかったと考えられる。

4．サブ政治と制度政治のアンチノミー――「緑赤連合」の困難

政党が国家機構と市民社会の双方から支持を得なければ衰退するのと同様に，社会運動も市民社会を動員すると同時に政党に影響力を及ぼさねば目標を達成できない。両者はしばしば交錯し，相互の目標に影響を及ぼすような同盟を形成する。そして新しい社会運動に関する研究では，運動の自律的な世界と政治制度の乖離が目立つようになったことが指摘されている（Maguire 1995：199）。

本稿では，その乖離を３層に分けて分析することで，相互の連携と乖離のダイナミズムを描き出してきた。当初の運動はサブ政治を活性化させた構想力の優位により，その後の展開をもリードすることになる。しかし，このとき運動には，制度政治への対応という負荷が逆にのしかかることとなる。すなわち，「サブ政治」での優位を「制度政治」での対応にどのように生かしていくのか[31]。西欧の緑の党の経験では，制度政治においては左派的政策を採用することで，赤緑連合が形成されてきた。すなわち，「赤」たる既成非保守は選挙連合のみならず，政治構想の立案にあたっても本来は重要な位置を占める。

しかし，少なくとも徳島の事例についてみると，「赤」たる既成非保守は「緑」が参照できるような政策パッケージを持っていなかった。それどころ

か，純粋に「緑」がイニシアチブをとった住民投票や2004年市長選では，組織的支援という点でも連合は中途半端なところで頓挫している。住民運動の不幸は，同盟者たる既成非保守が西欧に比べてあまりに弱かったことにあるのかもしれない。

注

(1) 本稿で直接用いるのは，1999～2007年にかけて141人に対して150件行ったインタビュー調査のデータである。バックデータとして，2000年，2002年，2004年に行ったサーベイ調査の結果も参考にしているが，ここでは明示的に扱わない。詳しくは以下を参照（久保田ほか 2005, 2008；丸山 2006；高木ほか 2005, 2006；矢部ほか 2005）。他にプロジェクトの関連文献として以下がある（丸山 2007；丸山ほか 2006, 2007；松谷 2007；松谷ほか 2005, 2006a, 2006b, 2007；Yabe et al. 2007）。

(2) 通常は「赤緑連合」と呼ばれるが，徳島でイニシアチブを取り続けたのが住民運動であることに鑑みて，「緑赤連合」としてある。ここでいう「赤」とは，西欧における社民勢力の機能的等価物という程度の意味であり，純然たる左派を指すわけではない。また，徳島の文脈で緑赤連合といった場合，西欧のような議員同士が連立政権を築くような形ではなく，知事や市長をめぐる選挙連合としての性格が強い。

(3) この点については，ギデンズのいう生活政治の議論に詳しい（Giddens 1990, 1991, 1992）。

(4) 住民投票運動で作成されたポスターから引用。

(5) このような政治なるものの境界の変化については，Maier（1987）を参照。

(6) ベックは，この点を十分意識していないように思われる。

(7) ある民主党関係者は，住民運動の「地域政党化」を当事者は自覚していなかったのではないかと述べているが，正しい指摘だろう（2005年２月18日に行われたインタビュー）。

(8) ただし，勝手連の競合相手は，保守政党に限らない。現に1999年４月の市議選でも，既成非保守政党との票の競合が問題になっていたし，2003年県議選ではこうした問題が表面化したといってよい（丸山 2006）。

(9) 住民運動関係者に対するインタビューでの発言（2005年２月22日）。

(10) 運動と保守との競合については，久保田ほか編（2008）を参照。

(11) 運動と同盟者との関係については，政治的機会構造論（e.g. della Porta and Rucht 1995）を参照。

(12) 大田氏は勝手連の主要メンバーの会合に呼ばれた際，本来は住民運動のメンバーが出たほうがよいが，誰も出なかったら自分が出てもよい，といったという。それは，大田氏自身が県議としてできることに限界を感じており，さまざまな制約に嫌気が差して引退を考えていたこと，ただし引き際に圓藤知事に「一太刀浴びせたい」という気があったことによる（複数の勝手連メンバーに対するインタビューによる）。勝手連メンバーの一定割合は本気で知事選に勝てると思っていたようであるが，県議の大田氏がそのような甘い見通しを持っていたとは考えられず，負ける選挙を「引退の花道」と考えたのは事実だろう。

(13) 社民党県連に対するインタビュー（2005年３月31日）。

(14) 2003年11月25日に行った勝手連メンバーへのインタビューより抜粋。

(15) 2001年知事選の際に，大田陣営（勝手連）が出したキャッチフレーズ。可動堰計画の中止，公共事業への住民意見の反映，自然回復型経済モデルの創出などが具体的な政策の柱であった。

(16) 2003年10月25日に行った勝手連メンバーへのインタビューより抜粋。

(17) このとき，公明党は公式には自主投票を決めている。

(18) 労働組合は，現職首長との関係を良好に保ちたいという意向が働くため，大田氏が出馬しても簡単に乗り換えるわけにはいかない。しかし，現職がいなくなって新規の選挙になれば，そうしたしがらみはなくなって大田氏に乗り換えることができる（2005年６月30日に行ったフレッセに対するインタビュー）。連合に対するインタビューは拒否されたが，その最大の傘下組織である自治労は，2001年には県職労が現職支持を打ち出したため自主投票になった。それが，2002年にはスムーズに大田支持を打ち出せたという（2005年２月18日のインタビュー）。

(19) 2005年10月14日に行われたインタビューによる。

(20) ある勝手連関係者は，可動堰問題で国に申し入れていれば100点，そうでなければ０点しかありえないと大田県政を評価している（2005年３月28日インタビュー）。

(21) 勝手連の選挙参謀は，支持をめぐって一番もめていたのが勝手連であり，中心にならなければならないメンバーが煮え切らないのでは勝てるわけはないとした（2005年９月13日のインタビュー）。

(22) 2003年８月25日に行ったインタビュー。（　）内は筆者の補足。

(23) 2003年10月25日に行った勝手連メンバーへのインタビューより抜粋。（　）内は筆者の補足。

(24) 住民投票に個人的に関わったという労組関係者も，「ひょっとしたら，いやそんなに甘くは無いだろう，しかし徳島市民の民度を発揮するのではないか」という気持ちがあったという。それが結果をみて「こんなに開くかー」と当時の状況について述べている（2005年6月30日のインタビュー）。

(25) 部落解放同盟によれば，今後の選挙も考えると2002年に確立した6団体体制を崩すべきでないという意見は，団体間で共有されていた。しかし，「第十（堰の問題）でぽかっと出てきた」姫野氏には，要望に対してきちんと文書で回答してもらわないと支持できず，明確な回答がなかったため姫野支援では動かなかった。連合にも同様の動きがあったという（2005年9月14日のインタビュー）。

(26) ある勝手連メンバーの表現による（2005年9月15日のインタビュー）。

(27) 姫野選対幹部へのインタビュー，2005年8月17日。

(28) 住民投票運動の際，「123（住民投票の実施日であった1月23日を表したもの）」「住民投票」と書かれたプラカードを持った人々が道端に立つという運動のスタイルがみられた。これがいわゆるプラカード作戦であり，この運動スタイルは勝手連にも引き継がれた。

(29) 吉野川だより編集室，2003,『吉野川だより』83号から引用。

(30) 知事選において，大田氏は徳島空港の拡張・周辺整備事業の凍結を訴えており，知事に当選すると公約どおり，事業の一時中止を発表した。しかし，保守系県議からすれば，事業の一時中止は「議会に相談なく」決定されたため，保守系県議は県議会で大田氏に対して厳しい対応をとった（高木ほか 2006）。

(31) これは欧州の緑の党が直面してきた問題でもあり，さまざまな政策を組み合わせて対応せざるをえない（Kitschelt 1989）。

文献

Beck, U., 1986, *Risikogesellscaht : Auf dem Weg in eine andere Moderne,* Suhrkamp Verlag.（＝1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会――新しい近代への道』法政大学出版局.）

――――, A. Giddens and S. Lash, 1994, *Reflexive Modernization : Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order,* Polity Press.（＝1997, 松尾精文ほか訳『再帰的近代化――近現代における政治，伝統，美的原理』而立書房.）

della Porta, D. and D. Rucht, 1995, "Left–Libertarian Movements in Context : A Comparison of Italy and West Germany, 1965-1990," J. C. Jenkins and B. Klandermans eds., *The Politics of Social Protest : Comparative Perspectives on*

States and Social Movements, London : UCL Press.

Giddens, A., 1990, *The Consequences of Modernity,* Polity Press.(=1993,松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か――モダニティの帰結』而立書房.)

――――, 1991, *Modernity and Self-Identity : Self and Society in the Late Modern Age,* Polity Press.(=2005,秋吉美都ほか訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.)

――――, 1992, *The Transformation of Intimacy : Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies,* Polity Press.(=1995,松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容――近代社会におけるセクシュアリティ,愛情,エロティシズム』而立書房.)

Kitschelt, H., 1989, *The Logics of Party Formation : Ecological Politics in Belgium and West Germany,* Ithaca : Cornell University Press.

久保田滋・村瀬博志・高木竜輔・矢部拓也, 2005,「徳島県知事選挙における投票行動と争点およびネットワーク」『大妻女子大学人間関係学部紀要　人間関係学研究』6号.

久保田滋・樋口直人・矢部拓也・高木竜輔編, 2008,『再帰的近代の政治社会学――吉野川可動堰問題と民主主義の実験』ミネルヴァ書房.

Maguire, D., 1995, "Opposition Movements and Opposition Parties : Equal Partners or Dependent Relations in the Struggle for Power and Reform?" J. C. Jenkins and B. Klandermans eds., *The Politics of Social Protest : Comparative Perspectives on States and Social Movements,* London : UCL Press.

Maier, C. S. ed., 1987, *Changing Boundaries of the Political : Essays on the Evolving Balance between the State and Society, Public and Private in Europe,* New York : Cambridge University Press.

丸山真央, 2006,「ポスト55年体制期の地方政治のダイナミズムと『新しい政治文化』――2003年徳島県知事選を事例に」『日本都市社会学会年報』24号.

――――, 2007,「投票行動研究における社会学モデルの現代的再生に向けて――社会的ミリュー論による日本政治研究のための方法論的整理」『一橋研究』31巻2号.

――――・高木竜輔・村瀬博志・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・松谷満, 2006,「誰が『改革派知事』を支持するのか――橋本大二郎・高知県知事への投票行動を中心に」『徳島大学社会科学研究』19号.

――――・高木竜輔・久保田滋・樋口直人・松谷満・矢部拓也, 2007,「ポピュリズムと底辺民主主義の隘路――2006年長野県知事選での田中康夫の敗北をめ

ぐる投票行動」『茨城大学地域総合研究所年報』40号.
松谷満，2006,「参加型民主主義の蹉跌 —— 権威主義の変容と『勝手連』選挙のアンチノミー」『ソシオロジ』157号.
————，2007,「脱政党政治と価値意識 —— 政治文化論の再構築に向けて」大阪大学人間科学研究科提出博士論文.
————・高木竜輔・丸山真央・村瀬博志・樋口直人，2005,「『受け入れ』と『統合』をめぐる社会意識 —— 何が外国人問題への態度を規定するのか」『アジア太平洋レビュー』2号.
————・高木竜輔・丸山真央・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・村瀬博志・町村敬志，2006a,「劇場型選挙のプロレゴメナ —— 2005年総選挙における東京都民の投票行動と社会意識」『茨城大学地域総合研究所年報』39号.
————・高木竜輔・丸山真央・樋口直人，2006b,「日本版極右はいかにして受容されるのか —— 石原慎太郎・東京都知事の支持基盤をめぐって」『アジア太平洋レビュー』3号.
————・伊藤美登里・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・高木竜輔・丸山真央，2007,「東京の社会的ミリューと政治 —— 2005年東京調査の予備的分析」『徳島大学社会科学研究』20号.
村瀬博志，2004,「住民運動が切り開いた政治空間 ——『サブ政治』としての勝手連がもたらしたもの」『一橋研究』29巻3号.
Offe, C., 1987, "Challenging the Boundaries of Institutional Politics : Social Movement since the 1960s," C. S. Maier ed., *Changing Boundaries of the Political : Essays on the Evolving Balance between the State and Society, Public and Private in Europe,* Cambridge : Cambridge University Press.
Poguntke, T., 1993, *Alternative Politics : The German Green Party,* Edinburgh : Edinburgh University Press.
高木竜輔・丸山真央・村瀬博志・久保田滋・矢部拓也・樋口直人，2005,「ポスト55年体制下の社会意識と地方政治 —— 徳島市における投票行動の分析を通じて」『茨城大学地域総合研究所年報』38号.
高木竜輔・丸山真央・村瀬博志・久保田滋・樋口直人・矢部拓也・松谷満，2006,「住民投票と政治変動 —— 吉野川可動堰建設問題と民主主義の実験，1993-2004」『徳島大学社会科学研究』19号.
矢部拓也・高木竜輔・村瀬博志・久保田滋，2005,「住民投票から知事交代へ —— 大田県政誕生をめぐる環境主義とモラル・クルセードの連合」『徳島大学社会科学研究』18号.

YABE Takuya, MATSUTANI Mitsuru, TAKAKI Ryosuke, MARUYAMA Masao, MURASE Hiroshi, KUBOTA Shigeru and HIGUCHI Naoto, 2007, "Social Consciousness and Local Politics under the Post-1955 Regime: An Analysis of Voting Behaviors in Tokushima, Japan," *Social Science Research University of Tokushima,* No. 20.

(付記) 本稿は，久保田滋，矢部拓也，松谷満，高木竜輔，丸山真央の各氏との共同研究にもとづいており，科学研究費補助金による研究成果である。インタビューにお答えいただいた多くの方に深く感謝したい。